音韻音楽学

♪ 音韻音楽学 の分析

1. 定義

音韻音楽学 = 言語の音韻体系・リズム・プロソディ と 音楽(リズム、グルーヴ、作曲、演奏) がどのように相 互作用するかを研究する学問分野である。

Linguomusicology(記号論的モデルや「言語としての音楽」を扱う)とは異なり、音韻音楽学は **理論と演奏の 双方に根ざしており**、演奏可能であると同時に体系的でなければならない。

2. 対象範囲

- **音韻的基盤**:モーラ拍リズム、シラブル拍リズム、ストレス拍リズム、プロソディ、子音・母音のタイミング
- **音楽的応用**:グルーヴ知覚、記譜法、作曲的戦略、訓練法(例:オフビート・カウント、メタディヴィジョン)
- 学際的展開:言語学、認知科学、音楽理論、身体化された演奏を統合

3. 核心原理(スローガン)

理論は演奏できなければならない。演奏は科学的でなければならない。

- **演奏可能な理論** → あらゆる概念は楽器上・リズム上・実際の演奏において検証できる必要がある。
- **科学的な演奏** → 演奏は単なる「感覚」や伝統にとどまらず、分析可能であり、再現可能であり、厳密な枠組 みを通じて伝達可能でなければならない。

この二重の要求によって、音韻音楽学は以下の両極端に堕することを防ぐ:

- 演奏不可能な理論(音楽から遊離した学術的メタファー)
- 非科学的な演奏(直感のみで伝達可能性のない実践)

4. 位置づけ

- 従来の音楽学とは異なる:音楽学は音楽を歴史・文化など外部から研究する学問である。
- Linguomusicology (LMoW) とは異なる: グルーヴや身体的演奏経験に基盤を持たず、記号論的普遍を追求するアプローチ。
- 音楽理論・作曲論に近接:ただし言語学的かつリズム的基盤を伴う。
- 橋渡しとして機能:演奏者と研究者の間、身体的グルーヴと抽象的記譜・理論の間を結ぶ。



音韻音楽学 は、音韻学と言語リズムと音楽の実践を統合する新たな学問であり、

その核心は「理論は演奏可能でなければならず、演奏は科学的でなければならない」という原理にある。

リズムの抽象モデルは実演で検証されるべきであり、演奏は言語学・認知科学の厳密さをもって研究されるべき である。

この立場により、音韻音楽学は「演奏不可能な理論」と「非科学的な演奏」という半端な両極を超え、**真の橋渡し分野**として成立する。